ARPAK・NEWSLETTER

アルパック ニュースレター

VOL141　2007年1月1日　ISSN 0918-1954

迎　春

首里城正殿（本文中に関連記事があります）

目次／contents

新年のあいさつ…… 2

人・まち・地域…… 5

・食や農について楽しく学び、体験し、実践する「兵庫楽農生活センター」がオープンしました／原田稔

・アメリカの都市再開発から学ぶ～日本の都市再生にアメリカの経験をどう生かすか～ ／尾関利勝

・“ベリーフルーツの里”を目指して～第六次産業のまち 高島～／高野隆嗣

きんきょう…… 10

・第1回地域住宅計画賞「まちづくり活動部門」～姉小路界隈を考える会が「天下一」を受賞／石本幸良

・歩港会（あるこうかい）大盛況のうちに／坂井信行

メディア・ウォッチ…… 13

・「スーパー都市災害から生き残る」／森脇宏

・「まちづくり道場へようこそ」／森岡武

・「恋しくて」／鮒子田稔理

まちかど…… 16

・「御城」番から「街なみ」番へ～松阪御城番屋敷／高田剛司

新年のあいさつ

新年あけましておめでとうございます

地域力再生―当面する課題

取締役会長／三輪　泰司

今年、アルパックも私も区切りの年。創業40年・学研都市開始30年になります。

関西文化学術研究都市は、奥田東先生のご自宅で、構想理念と推進方策を話し、仕掛けに取り掛った1977年2月5日を本格的開始の日、と自分で決めていました。その動機はローマクラブの「成長の限界」。究極の目標は「幸せ」。

アルパック創業10年目でした。その10年後、1987年6月、建設促進法が公布されナショナルプロジェクトになり、それからまた20年経ちました。

2004年11月、STSフォーラム（科学技術と人類の未来に関する国際フォーラム）創立記念総会が開催され、昨年第2回。第3回は今年10月。以後毎年、京都で開かれることになりました。京都は歴史と規模がうまい構造になっていて、研究開発のコンテンツとネットワークが、忽ち文化にまで至ります。

2004年1月の本誌に、弊社尾澤が「研究開発型ベンチャーの第二段階支援に向けて」で、継続的成長のカギに、資金調達・経営ノウハウ・事業用地確保を上げ、高質で専門性の高い支援、ネットワークのキーマンが課題と言っています。総務部で会計も経験し、桂イノベーションパークなど、コーディネートをお手伝いしています。プランニング・コンサルタント・アルパックの責務は、「場所性」を読み、コンテンツと結び、経営力をテコに仕掛け、地域力の再生にキーマン集団として貢献することです。

究極の目標は、やはり「幸せ」。アリストテレスの論を敷衍すれば、幸福とは、哲学的生活－真・善・美、政治的生活－徳・和・志、享楽的生活－利・欲・銭。景観規制策を巡っても、この3つが現れますね。

個人としては、庶民感覚に立って3つとも尊重し、そのバランスを心掛け、引き続きGNH（国民総幸福量）による解を追求してみます。

人と組織の再生で新しい地域の芽をつくる

代表取締役社長・京都事務所長／金井　萬造

アルパックはこの2月で40周年を迎えます。これを機に新しい経営体制を確立してまいります。皆様の旧倍のご指導、ご支援を心よりお願い申し上げます。

地域社会は、景気が回復した企業やいまだ厳しい企業などまだら模様な状況ですが、多くの地域や組織がより豊かで、より楽しく、安心・安全である地域社会をつくっていくことに貢献していきたいと念願しています。

昨年は、多くの分野で多くの取り組みに参加して勉強させていただきました。一昨年と比較して、新たな取り組みとしては、日本観光研究学会会長に就任し、700人の会員や先生方と協力して、業界・学会・行政・大学の連携による観光地づくりに汗をかき、実業界からみた学会の活性化や若い研究者への励ましなどに取り組んでいます。

また、大学の非常勤の講義や色々な企画の講演やパネリストとして、日々厳しい中で教えられる自分を再発見する一年となりました。

都心部の民間力活性化や産業振興のリサーチパークやイノベーションスポットの将来像検討のフォーラムを開催させていただきました。全ての分野において、連携と協働による地域再生の実践の一年となりました。

アルパックの業務につきましては、各事務所の持続と発展へ、努力傾注の一年であったと思います。皆様のご指導ご鞭撻に心から感謝申し上げます。アルパックの所員もこれらの努力の中でチームワークやブレーンストーミングを通しての人と人の協力の大きさを身をもって感じた一年でした。特に企画書コンペ方式が広く採用されている中で、所内の経験を活かして、機敏に動き知恵を絞り協力し合うことができたと確信しています。本年もより一層に地域の資源が活かされ大きく地域が輝くよう最大の努力をし、地域に貢献してまいります。どうぞアルパックをよろしくお願い致します。

本年もどうぞよろしくお願いいたします

「新しいこと」を考え出す人の時代

大阪事務所長／杉原　五郎

ダニエル・ピンクの『ハイコンセプト～「新しいこと」を考え出す人の時代』（大前研一訳）を読みました。これまでの「左脳思考」だけではだめで、これからは「右脳による感性」が重要、というのがこの本の主張でした。「機能」よりは「デザイン」、「議論」よりは「物語」、「個別」よりも「全体の調和」、「論理」ではなく「共感」、「まじめ」だけでなく「遊び心」、「モノ」よりも「生きがい」が大切というのです。

将棋界の第一人者で7冠にもなった羽生善治さんは、将棋の難しい最終局面のことを語っています。「直感的にすっと最善手が浮かび、それを論理的な読みで確認をする」という点が印象に残っています。東北大学未来科学技術共同研究センターの川島隆太教授は、子ども達に囲碁や将棋をしてもらって脳がどのように働くのかという実験をして、羽生さんの発言を実証しています。

昨年11月、「ユニバーサル・コミュニケーション」をテーマとするシンポジウムにパネリストとして参加する機会がありました。そこで、私は、異質なものを結びつけ異分野を繋ぐひとの役割（コーディネータ）に言及しました。また、携帯、メール、インターネットによるデジタル型メッセージ情報に加えて、顔と顔をつきあわせて交わすアナログ型マッサージ情報の大切さについて発言しました。

地域経営（まちづくり）でも企業経営においても、先がなかなか読みにくくなっています。これまでのやり方ではうまくいかなくて、どこかで突破（ブレークスルー）することが求められています。今年は、右脳と左脳を最大限に発揮して、何か創造的な仕事にチャレンジしてみたいと考えています。

本年も、どうぞよろしくお願いします。

合併、道州制、地方選など地域の自治を考える年

名古屋事務所長／尾関　利勝

昨年の名古屋都市圏は一昨年の中部国際空港開港と愛・地球博開催に引き続き、「元気名古屋」と各地から注目を受けました。地勢的には日本の中央にありながら、従来、余り話題にならなかったこの地域に注目して頂いたことに、感謝を申しあげます。

冷静に「元気名古屋」を見ると3つの側面があります。

第一は、空港開港や博覧会の経験による県民意識の高揚です。国際博覧会初の本格的ボランティア参加は県民に大きな達成感を持たせる機会となりました。

第二は、輸送機器を中心とする製造業の頑張りです。名古屋都市圏には国内主要輸送機器メーカーとその関連産業が集積し、地域経済をリードする反面、サービス業はじめ他の分野はまだ低迷しています。自治体財政の回復が遅れる中、対行政サービス分野は私たちの業種を含めて、長期低迷を続けています。

第三に、昨年、名古屋は地価上昇率日本一と言われましたが、内容は実需用にはほど遠いファンドビジネスによる投機的不動産売買によるものです。不動産関係者の情勢判断は様々ですが、現状は間違いなくはじけざるを得ないバブルとの観測が専らです。

全国では市町村合併がほぼ一段落し、各地で地方分権や道州制の議論が盛んです。一昨年の構造計算偽装問題にはじまる建築士法改正や資格のあり方についての国レベルの議論も建築関係者として見逃せません。今春は統一地方選があり、愛知では春一番に県知事選があります。政治や行政、まちづくり専門家だけでなく、主人公の国民が地域と自治を考える機会になることが選挙の重要な意義でしょう。地域づくりを進める上で、今年は自治のあり方を考える契機の年になるように思います。

本年も地方シンクタンク＋計画・デザインコンサルタントとして一層の精進を心がけてまいります。引き続き、ご指導ご鞭撻を御願い申しあげます。

新年のあいさつ

新年あけましておめでとうございます

10年かかって頭と顔が出てきました

東京事務所長／小林　佑造

年始に何度かご報告させていただきました昭和42年入居団地702戸の「建替え推進決議」が通り、構想段階から計画段階に入ることになりました。

初期に入居した人たちがこれから定年を向かえ設備のリニューアルもままならず、外部環境はよいけれども住宅機能が若い人の生活スタイルに合わなくなってきていました。このような中で市でも2番目に高齢化が進んでいる地域になりつつあった時期の10年前、有志による「勉強会」から始まりました。

6年前には、大規模修繕を考えつつ、団地長期計画の中で、建替えを行う時期が提案され、「勉強」だけではない何か具体的なことを知り、自分たちの団地に照らし合わせた検討が始まりました。

3年前には、形にしていかなければ「何か虚しい」、建替えは団地規約にないことから、「建替え問題を本格的に取り組む決議」が採択（93%）され、3カ年計画で「建替え推進決議」を行うという、素人だけで、無謀とも思える目標を掲げたのです。

『建替え検討<原案>』（A3判21頁）が居住者で構成するメンバーに事務所の斎藤がアドバイザーとして加わり、私は居住者委員として参加。

老人パワーも捨てたものではありません。話が逸れるとそちらの方が長〜い話になり、これに耐えうる心の準備も学びました。また、ポジション設定がハッキリすると、今年の干支ではありませんが「猪突猛進型」で、70歳前後の方達のエネルギーを集結した結果が21頁に集約されています。3年前までは、専門家の参加もなく、素人集団だけで期間も先の光も見えない手探りの約束事を、現実のものにできたこと。これを次の「建替え決議」にどう活かせるか、事業協力者との協議にどう活かすか、また報告をさせていただきます。

気になる福岡市のこれから

九州事務所長・(株)よかネット　代表取締役／山田　龍雄

あけましておめでとうございます。

世間では景気が良いという噂が漂っていますが、まだまだ九州などの地方並びにコンサルタント業界は景気の波に乗れていないようです。最近、気になることを3つ報告します。

今後の福岡市はどうなるのか？

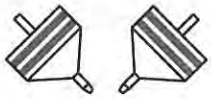
福岡市では新市長が誕生しました。福岡市の新たなスタートとなるのか、さらに無理な開発を誘導し、借金を増やすのかが気になるところです。前市長のオリンピック誘致は、福岡市の財政上無理があったので個人的には東京に決まって「ほっと」しております。

福岡市の非戦災地区の思い出マップができないか？

昨年、遅ればせながら映画「ALWAYS 三丁目の夕日」のビデオを見て、昭和30年代が懐かしく感じられました。年々、福岡市も開発が進み、街なみも変貌していき、便利・お洒落になってきています。最近、年のせいなのか、当時の街の様子を覚えている人が亡くなっていく前に、昭和30年代の街の記録を留めるようなことができないかと思案しております。

大相撲九州場所がなくなるのでは？

昨年、相撲ファンの小生としては、九州場所が見に行けなくて非常に残念でしたが、スポーツニュースで相撲の様子を見ていると、中段から上の方はお客さんが全く入っていません。大関の取り組みになってもガラガラです。お暇な方は、どうか今年の12月には九州場所に見に来ていただきたい。



食や農について楽しく学び、体験し、実践する「兵庫楽農生活センター」がオープンしました

大阪事務所／原田　稔

神戸市西区に「兵庫楽農生活センター」がオープンしました。オープニング式典では、地元の農産物の直売、その農産物でつくったお菓子や豆腐などの試食、餅つきや料理教室など様々なイベントが催されました。

この施設は、兵庫の食や農について学び、体験し、実践できる拠点として兵庫県が整備を進めてきたもので、私たちはセンター全体の基本構想から施設の実施設計までをお手伝いしてきました。

オープニング式典の様子

レストラン「かんでかんで」

今回はレストラン棟、加工施設棟、管理研修棟の3棟からなる「交流館」、しいたけ栽培の見学や体験もできるきのこ栽培施設「きのこ館」、新旧の農機具を展示する「農機具展示庫」が整備されました。西側のほ場では、先行して、生きがい農業を楽しむ人や農業経営を目指す人の支援、育成を行う楽農学校や親子で稲作の体験ができる親子農業体験が行われています。今後は順次、果樹園や農産物直売所、デイキャンプ場等が整備されていく予定です。

また、この施設の特徴は、事業運営を(社)兵庫みどり公社と事業プロポーザルにより選ばれた民間企業や地元組織が連携して行っている点にあり、これからの新しい事業モデルとしても注目されるところです。

センターの中心の建物である交流館は、欧風木造の平屋建てで、背後の山並みを背景に広場を取り囲むように3棟がLの字型に配置され、その3棟をデッキテラスがつなぐデザインとなっています。

レストラン「育みの里“かんでかんで”」

食品スーパーなどを手がける(株)トーホーが運営するレストランで、センター内のほ場での農業体験や里山再生事業も実施し、一貫した食育・食農活動が実施されます。食材はセンター内のほ場と県内産の農産物を厳選して使い、昼は約50種から選べるバイキング形式、夜は神戸ビーフも味わえます。レストラン名の“かんでかんで”は、地元の地名“神出”と“よく噛んで食べてほしい”との想いを掛け合わせつけられました。

加工施設“くち～なかんで”

地元農家でつくる「楽農生活地元実践グループ加工部会」がセンター内のほ場や地元で穫れた農産物を材料としたジャムやお菓子、惣菜や豆腐などの製造を行い、レストランや土日に行われる直売所で提供される他、干し柿づくりやしめ縄づくりなど、農家の四季の暮らしが体験できるイベントが用意されています。

“くち～な”とはイタリアの言葉で“台所”を意味するそうです。

「兵庫楽農センター」

神戸市西区神出町小東野30-17
TEL078-965-2651
http://www.forest-hyogo.jp

アメリカの都市再開発から学ぶ
～日本の都市再生にアメリカの経験をどう生かすか～

名古屋事務所／尾関　利勝

38年前、関西ではじまった再開発事業

1969年に都市再開発法が制定されてから38年。それまでの土地区画整理事業や市街地改造事業、防災建築街区造成事業の手法をベースとして発展させ、「都市計画事業」の位置づけのもと、道路・広場などの公共施設と宅地・建物を一体的同時に整備するため、地権者の資産を再開発前後で置き換える「権利変換」手法を持ち、事業の資金調達を「保留床処分」にゆだね、これを「補助金」で支援する市街地再開発事業は、当時の社会状況に合致した優れた事業手法でした。事業誕生の契機となった大阪駅前再開発を皮切りに、関西の主要駅前地区を網羅し、その後、全国に波及、現在では首都圏に市街地再開発事業の中心が移っています。そのためか初期の再開発コーディネータは、故・藤田邦昭先生はじめ、関西で腕を磨いた方が多かったのですが、今は若手をはじめコーディネータの多くは、事業と同様に首都圏が主力になっています。

ニュータウン計画と再開発で鍛えられた時代

私は1970年の大学卒業と同時にアルパックに入社し、再開発がはじまったばかりの関西で再開発事業に鍛えられた一人です。当時は戦災復興事業が一段落した後の高度経済成長のまっただ中、大都市への人口集中が進む頃でしたから、一方では新住宅事業法や土地区画整理事業によるニュータウンの建設が進み、片方ではニュータウンの母都市の交通・商業拠点を市街地再開発事業で整備することが同時並行的に進んでいました。この社会状況は今では一変していますが、後にふれるアメリカの都市再生と社会的背景や事情とはずいぶん異なる点です。当時を振り返ると、JR吹田駅前の再開発と同時に千里ニュータウン、JR京都駅南口や山科駅前の再開発を計画しながら洛西ニュータウンや平城ニュータウン、桂坂の計画に携わり、集中的に都市開発計画論や整備手法を習得、勉強した頃でした。

JR吹田駅前再開発事業

時代とともに変化してきた再開発

このように優れた街区整備手法である市街地再開発事業も時代の変化と社会の要請、個々の事業地区からの提案を受けて、制度の適用が多用に充実されてきました。権利変換を基本とする第一種事業の他に、管理処分（買収型事業）方式の第二種事業の創設、施行主体は当初の公共団体と組合から、公社・公団施行、さらには民間ノウハウを活用した事業代行や特建事業者方式など、多様な取り組みの巾を持つようになり、再開発がさらに広がることになります。

再開発事業を巡る新たな局面

今、首都圏で再開発が盛んな反面、地方や地域によっては再開発に消極的な公共団体が見られます。主な原因は自治体財政の逼迫による補助金負担の削減です。長期的には事業の経済波及、税収効果で自治体が潤うと言う図式があっても、当面の補助金負担が出せないのです。加えて、権利が細分されがちな区分所有共同ビルの保留床処分が難しく、事業の資金調達を補うべく公共団体が直接、あるいは第三セクターで保留床を購入するケースが多くの事例で見られました。これも財政事情の厳しい自治体が再開発に消極的になる要因の一つです。これを補うように土地信託事業の採用や最近ではSPC（特定床持ち会社）を導入する場合もありますが、このような事業方式は再開発後の収益性、利回りの確保が前提となるため、首都圏や中核都市の駅前、繁華街など立地条件が限定され、何処でも出来るものではありません。このように従来の再開発事業は公共団体のバックアップ、リードがあってこそ成立してきたのです。少子高齢化と人口減少期、地域間競争と都市魅力の向上、国際化と交流時代、防災・防犯・安心・安全なまちづくりなどを背景に、都市再生や中心市街地活性化を主題としながら、首都圏や特定地域を除いては、それすら進まない現状には、未来へ

ポートランド：川沿いの工場跡の住宅再開発　2004

シアトル：海への視線をデザインガイドラインで確保。高速道は撤去予定 2004

ミネアポリス：ニコレット・モールとスカイウェイ　2006

の社会基盤づくりに危惧をせざるを得ません。

アメリカの都市再生と再開発から学ぶ

従来、日本の再開発関係者の多くは、計画やプランを学ぶため欧米、とりわけアメリカの再開発事情を視察しています。私も専門家仲間や地権者の方と何度か行きました。日本の再開発初期の頃には、日本ではまだ少なかった本格的ショッピングセンターをはじめ、コンベンションセンター、コンドミニアム、オフィスビル、都市の交通環境のモデルを学び、最近では歴史のある町並みの再生や町のマネージメントを学ぶことが多くなっているようです。

おかげで、今では日本の都市にはアメリカに負けないほど摩天楼が建つようになりました。当初、権利変換にこだわる発想から用地買収方式のアメリカの再開発は住民追い出しと批判的感想を持ったものです。この意識が今ではすっかり変わり、アメリカの再開発は大変優れていると思うようになりました。もちろん背景となる国、州、郡、市の政府の成り立ち、NPO に代表される住民自治意識、コミュニティと宗教観、都市の工業と車による環境悪化、大量の移民流入にともなう都市中心部のスラム化、納税人口の郊外流出、都市の経営破綻と再生など、日本とは社会システムも都市課題も大きく異なることを理解した上で、なおかつ優れていると思うのです。

アメリカの再開発のミソはバリューアップ

アメリカの都市再開発は主に 1950 年代から大都市を中心に始まり、この間約半世紀、時々の課題に対応しつつ、様々な経験と工夫を重ね、市民の検証を得て、現在の再開発システムが構築されて来ています。州や都市によって、方法の違いは見られるものの、各都市に共通して流れる再開発の背景と思想は、都市の自治に基づく自立的な都市経営の確立のための都市再生、および都市間競争の中で、都市と街に人を呼び戻すための「場の価値の向上」であることを強く感じます。だからこそ、持続的に都市再開発に取り組んでいけるのでしょう。

ロスアンゼルス：ハリウッドの BID 地区再開発。ハリウッド・ハイランド　2006

アメリカの再開発システムの特徴

これまでの視察や講演などから学んだアメリカの都市再生とそのシステムの特徴をみると、①都市再開発実現のための行政のリーダーシップ、②再開発公社（準公的機関）で立案され、議会認知と市民評価を得た都市計画・マスタープランやデザインガイドライン、③公社によるクリアランスと TIF（開発後の税評価に基づく資金調達＝開発利益の先取り）などの活用、④連邦政府や州の補助金、郡の支援・広域調整、⑤マスタープランに基づきコンペで選ばれた民間事業者による社会貢献義務を持つ施設整備と事業経営、⑥民間開発プランの市民評価（二段階目）、⑦地区のビル所有者が共同で街の環境維持・管理を進める BID（市がビル評価額に基づく目的税を徴収し、維持管理費用として地区に還元）などが上げられます。このように、計画（入口）から管理運営（出口）までリンクする一連の都市再生システムの見事さを痛感せざるを得ません。

アメリカの再開発から取り入れたいこと

都市計画に基づくアメリカの再開発は地区毎に機能配置され、日本に見るように金太郎飴の開発にはなりにくく、敷地の共同化と再開発にとどまる日本と較べて、面的かつ長期的に都市を再生し続けていること。都市経営の視点から産業振興のためのビジネス、コンベンション、都心観光と商業再生、人口の呼び戻しが密接に結びついていることなど、文字通り都市の再生になっていることが評価できます。

大きな違いは、行政（連邦政府・州・郡・市）、議会、再開発専門機関、デベロッパー、不動産所有者、市民・コミュニティ～ NPO の役割と責任の分担です。これらの関係を成り立たせる背景として、昨年、京都事務所で勉強したシアトル市の例（vol.139 で紹介）を始め、アメリカ各都市に見る民主主義と都市の自治、これが組み込まれた都市計画と再開発のシステムを日本流に取り入れるべく勉強したいと考えています。

〝ベリーフルーツの里〟を目指して

～第六次産業のまち　高島～

京都事務所／高野　隆嗣

美しく四季の表情豊かな田園都市にて

高島市は、日本の真ん中、滋賀県の北西部にある、湖と里山に抱かれた田園都市です。寒暖の差の激しい気候と水と緑にめぐまれた大地には、四季折々の作物がたわわに実ります。私たち来訪者をほっこりとした気持ちにさせてくれるのは、こうした自然環境だけではありません。昼下がりに今津港の湖畔で腰を下ろしていると、眼前に広がる琵琶湖でボートを漕ぐ中高生の姿は、琵琶湖周航の歌そのままです。

美しい湖、四季の表情豊かな里山と、豊穣な大地を有する高島市は、平成17年1月に6町村が合併して誕生しました。これにあわせて6商工会が合併して平成18年4月に生まれたのが高島市商工会であり、合併後第一弾で商工会が取り組んでいるのが「ベリーフルーツの里」プロジェクトです。

アドベリー、ブルーベリー、桑の実‥‥柿に栗

美味しくて健康なベリーフルーツの栽培を高島全域に拡げて、生産者，加工者、商売人が共同でまちの特産品にしていく。そんな思いを込めたのが「ベリーフルーツの里」構想であり、地域経済団体として商工会が中心となって「第六次産業のまち」を推進する試みです。

当ニュースレター（Vol.131）で既にご紹介した通り、高島市安曇川（あどがわ）町では平成15年よりニュージーランドからボイズンベリーの苗を特別に輸入して、ボイズンベリー産地化を進めています。国内唯一の産地として地名にちなんだ「アドベリー」のネーミングで栽培を拡大し、ジュースやアイスクリーム、ケーキなどの加工品は、既に名物となりつつあります。

ベリーフルーツの里プロジェクトでは、先行するアドベリーに続いて、ラズベリー、ブラックベリー、マルベリー、カシスなど、国内では馴染みの薄いベリー類を中心に栽培をスタートしています。また、既に知られる今津柿やマキノ栗などとあわせて、生産･加工･宣伝･販売を推進するものです。

試作品もたくさん生まれています！

新しいベリーフルーツは昨秋に苗を植えたばかりですし、アドベリーも未だ充分な生産量が得られていません。果報は寝て待て。実をつけるには暫し休憩‥、とも言っていられません。新しい作物を栽培する農家が増えてもらうためには、一定量の「売れる（農家から購入できる）見通し」を立てる必要があります。今回のプロジェクトもアドベリーの「緒戦勝利」がなければ実現しなかったでしょう。

そこで少々気が早いのですが、「高島産ベリー」の収穫を見越して、「ベリーフルーツ商品（加工品）」

アドベリー（ボイズンベリー）の果実。プリプリです。

夜更けまで続く評価会（試食）。おっ、お腹が苦しい。

アドベリー酒（左）と梅酒（右）

ラズベリー＆桑のチーズケーキ

アドベリーのトリュフ

づくりを進めています。作秋実施の試作品だけでも30品目以上ありますが、ちょっとだけご紹介します。

お酒を嗜まれるみなさんには、上原酒造さんの「アドベリーのお酒」。特別純米の５年熟成酒にアドベリーを浸けたリキュール。アドベリーの甘い香りがよく出ている一方、口に含めば正しく日本酒！高島産の梅を漬け込んだ梅酒も、また美味です。

ベリーフルーツといえばやっぱりお菓子。アイデア品がたくさんありますが、一押しはとも栄さんの「アドベリーのトリュフ」。駿河屋さんの「桑＆カシスのプリン」が試食会では好評でした。今津柿の試作品も色々出ましたが、福月さんの「柿ジャム」、ルシアンさんの「柿シャーベット」が好評。柿ジャムは前川さんの自家製牛乳で作ったパンと合わせれば、素朴な風味が倍増です。変り種は宝船さんの「カシスの発酵ジャム」。芳醇な香りで存在感も抜群。

読者のみなさんの「何て美味しそう！どこで買えるの？」という声が聞こえてきそうですが、これらの多くは開発途上のもの。現時点では販売している商品は多くありませんが、一部は購入可能です。お問合せは高島市商工会「ベリーフルーツの里」担当（TEL 0740-32-1580）まで。

２月２日に「第六次産業シンポジウム」を開催

「商工業に携わる事業主」で構成するのが商工会ですが、「ベリーフルーツの里」プロジェクトは、果樹の作付けから開発・加工・販売、そして観光誘客まで視野に入れた一体的な事業を目指すものです。「第六次産業都市」を体現する事業になる可能性を秘めています。

こうした地元の動きに呼応し、日本観光研究学会関西支部が高島市商工会と共同で「第六次産業シンポジウム」を開催します。２月２日（金）午後１時から高島市立安曇川公民館２階において。当日は基調講演やパネルディスカッションのほか、先述の「試作品」の試食会なども予定しています。参加無料です。

また、２月13日からの４日間、東京ビックサイトで開催の「東京インターナショナル・ギフトショー」に出展の予定です。

地域社会の「ソリューション提案」に挑戦します

今回、私も事業の事務局として参加させて頂いています。一昨年は小型プレス、昨年がネクタイ、今年はベリー。「おたくがそんな事もするの？」と言う方もいますが、「アルパック＝ハードのみ」との認識こそ大きな誤解。経済･産業振興に関する問題解決は、地域社会における最重要課題。この認識なしに「まちづくり」を語ることなど出来ません。

まだまだ、未熟者ですが、「地域の自立経営」に向けて、今年も果敢に挑戦します。ご指導・ご鞭撻のほどお願いします。

桑＆カシスのプリン

柿・ラズベリー・カシスのジャム。
後ろに見えるのは柿あんぱん

カシスの発酵ジャム

第１回地域住宅計画賞「まちづくり活動部門」～姉小路界隈を考える会が「天下一」を受賞

京都事務所／石本　幸良

姉小路界隈を考える会の活動が地域住宅計画推進協議会から「第１回地域住宅計画賞活動部門」を受賞しました。その報告を中心に姉小路界隈を考える会の取り組みを改めて振り返ってみます。

第１回地域住宅計画賞の応募案内「活動部門」には「5年程度以上活発に継続して展開している活動で、地域の住文化の育成に大きく貢献し、かつ、他の地域での活動の模範となるもの」との条件が書かれ、姉小路界隈を考える会の活動も平成７年10月開始から12年目を迎え、十分にその資格があるとの思い込みで「市民主導による美しい都市づくりへの実践」と題して応募しました。結果、賞選定の通知を受け、昨年10月12日の第１回地域住宅計画全国シンポジウム2006大阪大会で表彰を受けました。

表彰式は「作品　すまいづくり部門」、「作品　まちづくり部門」、「活動　まちづくり活動部門」の順に、奨励賞と本賞の順で表彰が行われ、私が最後に関大阪市長（協議会会長）から表彰状を受け取りました。「貴殿の活躍　天下一」との言葉に会場のどよめきと笑いと、そして私にとってはこの12年あまりの活動に対する安堵感のような思いがこみ上げてきました。ちなみに「住まいづくり部門－技量抜群」「まちづくり部門－海内無双」でした。

これまでHOPE計画の愛称で全国各地で数多くの「地域特性を踏まえた住まいづくり」が推進されてきましたが、住生活基本法の制定を受け、「地域住宅計画推進協議会」としては再スタートが切られ、その第１回の記念すべき大会でした。

姉小路界隈での受賞報告会の開催

受賞の報告および表彰状のお披露目をかねて、さる11月５日に姉小路界隈で報告会を開催しました。当日はこの表彰の仕掛け人である「独立行政法人建築研究所　研究主幹　岩田　司氏」をお招きして、氏に賞の紹介をして頂きました。以下に岩田さんの報告の一部を掲載します。

『地域住宅計画賞には３部門ございます。住まいづくり部門には「技量抜群」という名前を差し上げました。「技量抜群」というのは、実は横綱の推挙状に「技量抜群につき、横綱に推挙する」という一文が書かれているのですが、そこからヒントを得て、そういう名前にいたしました。

次にまちづくり部門は、奨励賞と本賞があるのですが、奨励賞は「綺羅星」という言葉を使いました。「綺羅、星の如し」という中国の故事がありまして、名だたる将軍が目の前に勢ぞろいする姿です。その本賞を「海内無双」としました。日本の中で一番、中国から見て、日本は四周を海に囲まれているので、日本の中で起こったことを「海内」と言うそうで、「海内随一」とか「海内無双」という言葉を使うそうです。

いよいよ活動部門ですが、そのまちづくりをひっぱる力というのは、ものすごく大事なので、その奨励賞はその努力をほめるという意味で「努力の賜物」といたしました。努力の賜物のなかで一番のことはやはり今回が大阪大会でありますので、「天下一」といたしました。

３部門の受賞者

表彰状「貴殿の活躍　天下一」

本日、姉小路界隈を考える会の活躍を見せていただいて、多くの立派な町家も残っていますし、住民参加でマンションもできており、これからの日本のまちづくりのお手本になると思います。「天下一」をもらったからと気を緩めることなく、是非これからもまちづくりに邁進していただきたい。』

姉小路界隈を考える会の12年を振り返って

姉小路界隈を考える会は設立から12年目を迎え、「看板の似合うまちづくり」「灯りでむすぶ姉小路界隈」「花と緑でもてなす姉小路界隈」など様々なイベントの継続により、界隈のまちづくりの輪が広がっています。「姉小路界隈町式目（平成版）」の制定、建築協定の締結、そして16年度には京都府下で初めての街なみ環境整備事業の実施により、京町家再生の事業も実現しました。また、地域共生の土地利用検討会の取り組みの成果として、事業者と協働でマンション建設を実現させました。

その成果として日本都市計画学会関西支部「2002年度関西まちづくり賞」、平成17年に国土交通省から「まちづくり功労賞」を受賞し、今回改めてHOPE計画の流れの中で賞を頂きました。

こうした活動は、市民主体の、市民によるまちづくり活動として広く認知されるに至り、全国から多くの見学者が訪れ、様々な活動と交流をしています。10月には大阪の平野郷HOPEゾーン協議会のみなさんが地区計画導入に向けての学習にお越しになられました。また、11月には新宿区の神楽坂の「粋なまちづくり倶楽部」の招待で、「京都にみる、歴史的界隈保全の動き～京都・姉小路界隈のまちづくりに学ぶ～」と題したシンポジウムが開催され、神楽坂地区と姉小路界隈地区の情報交流を行いました。

姉小路界隈を考える会の成果として

会設立以来の活動と併行して、京都の都心界隈では会の目的である「美しい都市づくり」に向けて新しい建築ルールの導入が実現しています。これまでの会の継続した活動が新しいルールを導入する後押しになったものと確信しています。その第一としては平成15年4月に「職住共存地区での新しい建築ルール」が導入されました。さらには「時を超え光り輝く京都の景観づくり審議会」の最終答申（平成18年11月）を踏まえ、平成18年11月24日に京都市は歴史都市・京都の優れた景観の保全・再生に向けて、「建物の高さとデザイン、屋外広告物についての抜本的な規制の見直し案」を発表しています。

会では京都市のこの積極的な取り組み提案を受け、都心の4つの建築協定地区の協働で新たな地区計画導入に向けた研究活動を開始しています。

「住みごこちのよい都心界隈」を目指して

会はこの12年間、じっくりと、丁寧に、まちの人の語り合いの中から「住みごこちのよい都心界隈」を目指して取り組んでいます。「『美しい都市づくり』とは『住みごこちのよい都市づくり』」、姉小路界隈を考える会は関一元大阪市長の都市論に学び、「住みごこち」を大切に今後も活動を展開していきます。

受賞報告会風景

歩港会（あるこうかい）大盛況のうちに

大阪事務所／坂井　信行

去る11月12日、大阪の港区で区内をめぐるウォーキングイベント「歩港会（あるこうかい）」が開催されました。築港から福崎、八幡屋などをまわるロングコースと築港内のポイントをまわるショートコースに約150名が参加しました。普段見慣れたつもりの自分たちのまちを改めて歩いて再発見しようという企画で、港区わがまちフォーラムと港区地域福祉アクションプラン推進委員会の共催で実現したものです。

港区わがまちフォーラムは一昨年、昨年と2年間取り組んできた「港区未来わがまち会議」をよりオープンな形で継承発展させた、区民が港区のまちづくりについて考え実践していくための場です（わがまち会議の取り組みについてはVol.137に紹介記事があります）。「歩港会」は、わがまち会議でとりまとめた「港区未来わがまちビジョン」の重点アイデアの実現化プロジェクト第一弾となりました。わがまち会議と同時期につくられた地域福祉アクションプランでも同じようなウォーキングのアイデアが出されていたことから、今回は一緒に実現をめざそうということで合同のプロジェクトチームがつくられました。

プロジェクトチームでは区役所や社会福祉協議会の支援を受けながらも企画、準備、当日の運営までできるだけ区民の方々の力で進めてきました。コースの設定や下見からガイドマップのネタ集め、参加記念のバンダナの準備、当日のスタッフの役割分担、参加申込者の抽選まで初めての試みで苦労しながらも何とかこなしてきました。イベントの名称を「歩港会－脚と船で知る港めぐり－」と決めるまでにも何度も議論しましたし、イベントのロゴマークもメンバーの一人がデザインされました。

当初、わがまちフォーラムのメンバーで議論を始めた時には「参加者がいなくても自分たちが歩いて楽しければいいか」という軽い（？）ノリだったのですが、実際の参加希望者は定員を上回り抽選となりました（今回は船にも乗るため参加者の定員を設定する必要がありました）。

今回はロングコース、ショートコースともに築港の海遊館前を出発点とする発見ウォークと船による港めぐりをセットにしたコース設定が行われました。ショートコースは築港内に設けられた4つのポイントでベイちゃん（港区のマスコット）のシールをゲットするラリー形式です。ロングコースではコース途中のいくつかのポイントで水質チェックしながら歩きました。水質チェックには地元の環境関連会社の協力もあり、解説付きの本格的な調査を体験することができました。港めぐりでは港湾局の広報船「夢咲」で海からの眺めを楽しみました。少し肌寒い一日でしたが、スタッフを含めて参加者みんなが楽しいひとときを過ごせたと思います。参加者アンケートでも高い評価を得ました。

今回の取り組みを通じて区内の企業などにもネットワークを広げることができました。わがまちフォーラムとしては第2回目の歩港会の開催とともに、新しいテーマへと活動を展開していくことが当面の目標です。

赤レンガ倉庫前にて

水質チェックも体験しました

ベイちゃんシールポイント

MEDIA WATCH

紹介者／大阪事務所　森脇宏

「スーパー都市災害から生き残る」

著者／河田惠昭
発行／新潮社

著者である河田先生（京都大学防災研究所所長）は、我が国はもとより世界各地の災害実例を踏まえてリアルに論述されており、それ故、たいへん分かりやすく書かれています。

防災専門家は災害を「田園災害」「都市化災害」「都市型災害」「都市災害」と４つの型に分類していて、これらの型を越える災害が、タイトルの「スーパー都市災害」と命名されたようです。阪神･淡路大震災が、その可能性を示唆した訳で、都市の規模がある程度を越えると、災害の規模や要素の複雑さが極端に拡大・膨張するため、大複合災害となり、これが「スーパー都市災害」と呼ばれています。

阪神・淡路大震災では、救助と情報・交通の関係が問題となりました。電話が不通となったため、親戚・知人の安否を確認するため被災地に入った自動車が、大渋滞をひきおこして救助部隊の到着を遅らせるとともに、道路を横切る消防ホースを踏みつけて消火活動を妨害しました。この反省から災害用の伝言ダイヤルが設けられましたが、スーパー都市災害では、さらに多くの予想しがたい事態が生じると思われます。

その一つが帰宅困難者の問題です。大都市で昼間に被災し、交通機関が止まった場合、歩いて帰宅するしか方法がない帰宅困難者が大量に発生します。最近、帰宅支援マップが出版されたり、テレビ番組が放送されるなど、関心が持たれてきました。これ自体はいいことなのかもしれませんが、帰宅困難者の議論に、重要な論点が欠落していることが、この本の各所で指摘されています。私なりに、３点に取りまとめてみました。

まず一つは、災害時の帰宅ルートは、災害前と全く様相が変わる危険性があることです。沿道建築物の倒壊や落橋などで行き止まりになるところも出てきますので、無闇に動いて体力を消耗することがないよう、ラジオ等で情報を得てから帰宅を始めることが重要です。

いま一つは、伝言ダイヤル等で家族の無事が確認できたなら、すぐには帰宅せず、職場周辺での倒壊家屋の下敷きになっている人などの救助に当たることが重要です。阪神・淡路大震災では、救助が早いほど生存率が高いことが確認されており、また救出された方の大部分は近所の人に助けられました。その一方で、早朝に起きて家族全員で避難所に逃げてしまい、救助活動に参加したのは成年男子の３割だけだったとも言われています。

そして三つ目は、瓦礫で狭くなった道路を、大量の帰宅困難者が車道まで溢れて歩き始めると、道路渋滞に拍車がかかり、救助に向かう部隊の移動を妨げることが危惧されます。

これら３点を総合化すると、被災後、家族の無事を伝言ダイヤル等で確認できれば、すぐ帰宅するのではなく、まずは職場周辺の救助活動に参加し、そのうちに明らかになってくる被害様相、ライフライン障害や火災発生の状況など、帰宅ルートに関する情報を踏まえ、安全でかつ救助部隊の移動を妨げない帰宅方法を検討することが必要だと思います。

その他、地名には災害の危険性が示されている場合があり、先祖が危険な場所であることを教えてくれているという話や、津波から逃げる歌をみんなが知っていたため被害が少なかった島の話など、「防災の文化」とも言える興味深い論点がたくさんありましたが、紙面の都合で省略します。

MEDIA WATCH

「まちづくり道場へ　ようこそ」

著者／片寄俊秀
発行／学芸出版社

紹介者／大阪事務所　森岡武

ものの書評には、まちづくり指南書とあります。

まちづくりに終わりはなく、日々是鍛錬あるのみ。故に「まちづくり道場」であると。道場の目的は、人を育てること。この書は、道場開設にあたり、まちづくりの“心技体”を道場十訓として章立てて分かりやすくまとめられています。

マニュアル本ではありません！

しかし、この書、マニュアル本ではありません。「まちづくり道場十訓（案）」と書かれています。「対案を考える（第６章）」、「ひねりを加える（第７章）」、つまり自分の言葉に置き換えろということです。

真剣仕合（まちづくり）

「中途半端だと愚痴が出る。いいかげんだと言いわけばかり。真剣だと知恵がでる。」

この言葉は、モクモクファームの吉田修氏に頂きました。この書はまさしく「真剣仕合」が丁寧に紹介されています。だから、愚痴や言いわけを繰り返している人々に読んでもらいたい。真剣に知恵を絞っている人々にも読んでもらいたい。知恵の源泉が盛り沢山です。字面を読むのではなく、背景を感じとることが重要です。

猛者紹介

また、門戸広く第５章（ほんもののキイパーソンとは）では、猛者が紹介されています。猛者というより奇異パーソンと言った方が適当かも知れません。なかなか出会えない人々が紹介されています。

仕合の基本姿勢

最近、まちで良く耳にする言葉に「あたり前！」、「誰がするの？」というのがあります。仕合放棄の代表的な表現です。この言葉には感じる力がありません。仕合開始はまず感じること。真剣さを伝えるために、懐に飛び込む（第１章～第２章）。いろんな角度から敵（課題や問題）を見る（第３章～第４章）。「愚痴や言いわけ」を言わさないように接近戦に持ち込みつつ、敵を見えるようにしてあげる（第８章～第10章）。“まち”と取り組む基本姿勢が書かれています。

仕合をつくる熱意

読み進めるにつけこの書の印象が変わっていきます。この書の前半部分は、著者は道場主であり、弟子たちが“仕合”をとおして成長する様を書きつづっているようです。が、途中から、著者自らが武芸者であり“仕合”をしていた実践者であることに気づかされます。「懐に飛び込まなければ“人＝まち”は動かない」、「自分で考え実践しないと“人＝まち”は何も変わらない」という主旨の下りに熱さを感じるのはこのためでしょうか。免許皆伝なのか、一子相伝なのかは道場の門をたたけということのようです。

まちづくり人（びと）を育てたい

“まちづくり人”とは、「基本姿勢を崩さず、仕合をつくる熱意を持った人」のようです。著者の仕合を見てとるに、「信じることを常に、自ら率先してブレないこと。」に悟りがあるようです。この書の言わんとするところは、自身の「まちづくり十訓」をつくることにあるようです。

まだまだ！

この書を読んで「あたり前」と感じた方。「誰がするの？」と叫んだ方。まだまだ修行が足りないようです。三田市でツーリズム、農業振興、景観、ごみ減量化の業務にたずさわっている当社のスタッフとまちづくり道場に入門しませんか。

MEDIA WATCH

映画
「恋しくて」

原案・主題歌／BEGIN
監督・脚本／中江裕司
企画・制作／葵プロモーション

紹介者／大阪事務所　鮒子田稔理

先日来春公開予定の映画「恋しくて」の完成披露試写会に行く機会を得た。この映画で監督・脚本を務める中江裕司氏は私の高校時代のクラブ活動の先輩であり、高校卒業後琉球大学に入学するとともに沖縄に移り、以来四半世紀に渡って映画制作活動に携わり「ナビィの恋」「ホテルハイビスカス」など沖縄を舞台にした映画で多くのファンを魅了している。

「ナビィの恋」では沖縄のおばぁの恋を描き、「ホテルハイビスカス」では沖縄の元気ではじける子供を描いた中江監督は今回の映画では沖縄の高校生の恋と成長を描いている。

アーティストBEGINの石垣島での青春時代をモチーフとしたこの映画のキャストは、石垣島の高校生ら3,500人の中から演技では素人の高校生を起用している。演技では素人ではあるが夢を追い大人に向かって進化し続ける高校生という「プロ」に賭ける監督以下スタッフの気迫が感じられる映画であった。この映画は脚本に従い撮影する所謂「順撮り」で撮影されている。この手法を使うことにより、主役の高校生たちが日に日にたくましく力強く成長していく姿をあざやかにあぶりだしている。成長を誘導するのではなく、ただ待つだけでもなく環境を整えて祈っている。「栄順よ！気付け！自ら進まなければ歩みは始まらないぞ」と祈っている。

昨年7月那覇市に古い映画館をリニューアルさせた桜坂劇場がオープンした。邦画、洋画、旧作と幅広いラインナップで月に20～30本の映画が上映され、その傍ら映画や沖縄の文化に関するワークショップも随時開催されている。中江監督はこの桜坂劇場を経営・運営する株式会社クランクの社長でもある。大きな劇場に圧され人通りも途絶えていた劇場に息を吹き込み、映画や沖縄文化に触れることで老若男女を問わず人が交流し、育っていく場を提供している。

中江監督はウチナーグチ（沖縄言葉）を使わない。字幕が出なければ我々には理解できないような沖縄の言葉を深く理解しつつ標準語のイントネーションで話す。沖縄の自然や歴史の厳しさ、美しさ、人間のたくましさを愛しながら一歩離れたところに身を置いて出演者やスタッフや自らをも俯瞰して映画を撮っているように感じる。それだからこそ沖縄の魅力を凝縮させたような映像が撮れるのかもしれない。

映画「恋しくて」はGW頃テアトル系ほか全国公開予定。美しい映像と心に沁みる音楽を是非劇場でご覧いただきたい。

「変しくて」じゃないよ。間違わんで！

恋しくて公式HP　http://koishikute2007.jp/
桜坂劇場HP　http://www.sakura-zaka.com

まちかど

「御城」番から「街なみ」番へ
～松阪・御城番屋敷～

大阪事務所／高田　剛司

三重県の松阪城下に残る武家屋敷。ここは、御城番屋敷（ごじょうばんやしき）と呼び、国の重要文化財に指定されています。写真でおわかりのとおり、きれいに手入れされた植栽と低層の瓦屋根からなる見事な街なみが残されています。しかも、ここには現在も人々が住みつづけ、博物館として展示された保存形態ではなく、住民が暮らしの中で保全をしています。

さて、ここまでの紹介であれば、全国の他の城下町にある武家屋敷とさほど変わりがない説明です。しかし、私が今回訪れてびっくりしたのは、この武家屋敷に住んでいた武士団が明治維新後に「苗秀社（びょうしゅうしゃ）」という会社を設立し、140年余り経った現在でも、その子孫たちが引き継いでいることでした。

案内パンフレットによると、会社は大正15年に合資会社に改組されて現在に至っており、直系の子孫からなる社員は現在11名で構成されているとのこと。明治15年の会社内規には「わが党各家は永世変わらず、苦楽をともにし、家門の繁栄を図ることを主眼とする」という設立の趣旨が記されており、それが現在まで活かされているわけです。

主屋（しゅおく）は東棟10戸と西棟9戸が連ね、苗秀社が維持管理をして12戸分が借家として利用されています。家と家との間は壁一枚の長屋であり、1戸あたりの広さもそれほど大きくないため、暮らしていくには結構不便を強いられているようです。それでも近年の町家ブームで借りたいという人が後を断たないとか。ちなみに、現在の家賃は月7万円ぐらいとのこと。庭付きですから、これは結構お得でしょうか？

この苗秀社は、昨今の景観論議で出てきている街なみづくりの担い手として、会社形態を選んでいるということで、先進的な事例といえるかもしれません。

ただし、残念なことは、この地区が映画のセットみたいに切り取られた空間で残されていることです。このような取り組みをさらに近隣に波及させて、全体の景観形成にいかにつなげていくかが問われていると思います。

松阪城跡からの眺め

主屋間の石畳

アルパック（株）地域計画建築研究所

http://www.arpak.co.jp　E-mail info@arpak.co.jp

本　社
京都事務所　〒600-8007　京都市下京区四条通り高倉西入立売西町82　TEL(075)221-5132　FAX(075)256-1764
大阪事務所　〒540-0001　大阪市中央区城見1-4-70 住友生命OBPプラザビル15F　TEL(06)6942-5732　FAX(06)6941-7478
名古屋事務所　〒460-0003　名古屋市中区錦1-19-24 名古屋第一ビル8F　TEL(052)202-1411　FAX(052)220-3760
東京事務所　〒186-0001　東京都国立市北1-1-17 田畑ビル3F　TEL(042)501-2531　FAX(042)501-3024　分室／TEL(03)3226-9130
九州事務所　（株）よかネット　〒810-0802　福岡市博多区中洲中島町3-8 福岡パールビル8F　TEL(092)283-2121　FAX(092)283-2128